



岸田 信行 さん

1961年、京都生まれ。文化財建築等の檜皮葺、こけら葺きなどの屋根工事を中心に請け負う岸田工業株式会社代表取締役。子ども時代は家業を継ぐつもりはなかったが、他社に勤めたのち、24歳で父の経営する岸田工業に入社。総勢25名の社員を率いる五代目社長として指揮を執る。

年間700本の木から檜皮を剥ぐ。
適切なタイミングで皮を剥ぐことは、
ヒノキの成長に役立つ。

半纏には『屋根重』の屋号が染め抜かれる。昔の建造物、見えない屋根裏には作事方が記録を残すことも多かった。「修理で屋根裏に上がって、先祖の『屋根重』の屋号を見つけたときは感動しました」。



檜皮葺の上賀茂神社楼門。

縁の下のカモチ

京都が誇る国宝・重文建築の
檜皮屋根を支え続ける職人たち

京都の国宝に指定された社寺、その屋根の多くは檜皮葺だ。檜皮とはヒノキの皮のこと。30〜40年に1度は葺き替える必要がある。昔と同じ手法で葺き替えを請け負っているのが、山科にある岸田工業の岸田信行さん。江戸末から檜皮葺を生業とする屋根屋の5代目だ。「重要文化財は創建時とまったく同じに復元する必要がありません」。

檜皮葺をとりまく環境は、材と人材の両方の確保が厳しい。かつてヒノキの皮は、各地の原皮師と呼ばれる専門職が納入していた。しかし人手不足のため、岸田工業の社員 11人が、山で皮を剥ぐ材料調達から行う。ヒノキの立ち木に登り、鉋でスイススイツと皮を剥ぐ。皮を

30kgの束にまとめて運び出すのは、大の男でも一苦労だ。次は、ヒノキの皮の厚みと長さを揃える「揃え」の作業が待っている。揃えて2年ほど置いて水分を抜いた檜皮が、ようやく屋根葺きに使える。神社の式年遷宮など、どこでいつ需要があるか推測して準備するのは、社長である岸田さんの仕事だ。

「黙々と木に向かう根気と忍耐がある仕事だから、人材の確保は課題です。でも、文化財の建築物がある限り、誰かが続けていかなければいけない使命も背負っています」。

社寺の檜皮の葺き替えに携わるのは京都では4社。職人たちの地道な仕事で、京都が誇る国宝建築の神々しいほどの美しさを支えている。



「はたらき」を化学する。
"Performance" Through Chemistry

私もカモチです

三洋化成工業株式会社

京都市東山区一橋野本町11-1

最寄りバス停は「泉涌寺道」

Twitter 始めました @sanyochemical

国宝・重文建築の維持を支える岸田工業と同様、三洋化成も暮らしや産業のさまざまな分野を支えています。

